コロナ禍における
交際と結婚の質的な変化

2023年10月1日

千葉安佐子（東京財団），仲田泰祐（東京大学）

RA：鳥井原遼（東京大学）

分析の目的

- 長期的トレンドとして婚姻数が減少している
- 2020年以降、婚姻数の減少は加速している（人口動態統計）
  - 『コロナ禍における婚姻と出生』（千葉・仲田）
    https://www.covid19-ai.jp/ja-jp/presentation/2022_rq1_simulations_for_infection_situations/articles/article442/
- 本分析では、コロナ禍における婚姻数減少の背景的事情と、コロナ禍前後における交際と結婚の質的な変化を明らかにすることを目的とする
  - 交際数の減少については、本調査と同時に行った別の調査をもとに分析
  - 『コロナ禍における交際数の推移』（千葉・仲田）

重要ポイント

- 2022年以降の調査では、直近1、2年以内に交際開始した人の割合が大きく減少している
- 女性の交際開始時点での非正規雇用者の割合・低所得者の割合が、2020年に一時的にトレンドを上回っている
- 女性の出会い方におけるインターネット・SNSの割合が、2020年以降トレンドを上回っている
- コロナ禍以降、コロナを原因とした結婚の延期・前倒しが見られる
- 別れの理由に関して、コロナ禍前後で顕著な変化が観察された
  - 「会える時間の減少」の割合（「価値観の違い」の割合）が、2020年に一時的にトレンドを上回った（下回った）
  - 「関係の不和・相手への不満」の割合が2020年、2022年に一時的にトレンドを上回った
- コロナ禍以降、結婚の時期や交際解消の時期に大きな変化は見られなかった

調査の概要

- 実施時期：2023年9月13日～ 2023年9月14日
- 実施対象：登録モニターの内、2014年から2023年までの各年1月時点において独身かつ交際相手のいた現時点で25歳以上45歳以下の男女（各年約1000サンプルを回収）
- 有効回答数：9953
- 基本属性
  - 男性：50.8%, 女性：49.2%
  - 平均年齢：35.8歳

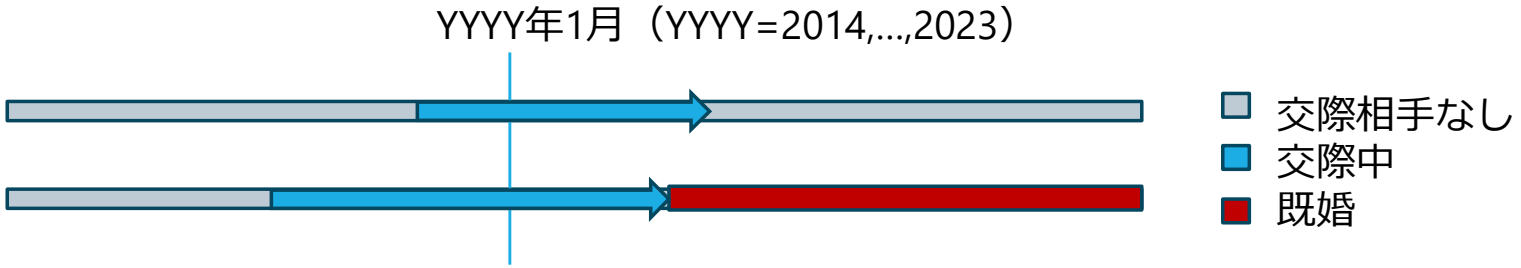
（内訳：25歳～29歳 19.8%, 30歳～34歳 21.7%, 35歳～39歳 24.6%,

40歳～44歳 28.5%, 45歳 5.4%）

本アンケート調査は、東京大学倫理審査専門委員会に申請し承認を取得している（申請番号：23-261）。

調査の概要

- 2014年～2023年までの各年1月時点において交際相手のいた独身者に当時の交際相手との交際状況を質問
  - 交際開始及び終了年月、出会いの方法、当時の状況（年齢、雇用形態など）
  - （結婚に結び付いた場合）結婚時期の延期の有無、その理由
  - （交際解消に至った場合）交際解消の理由



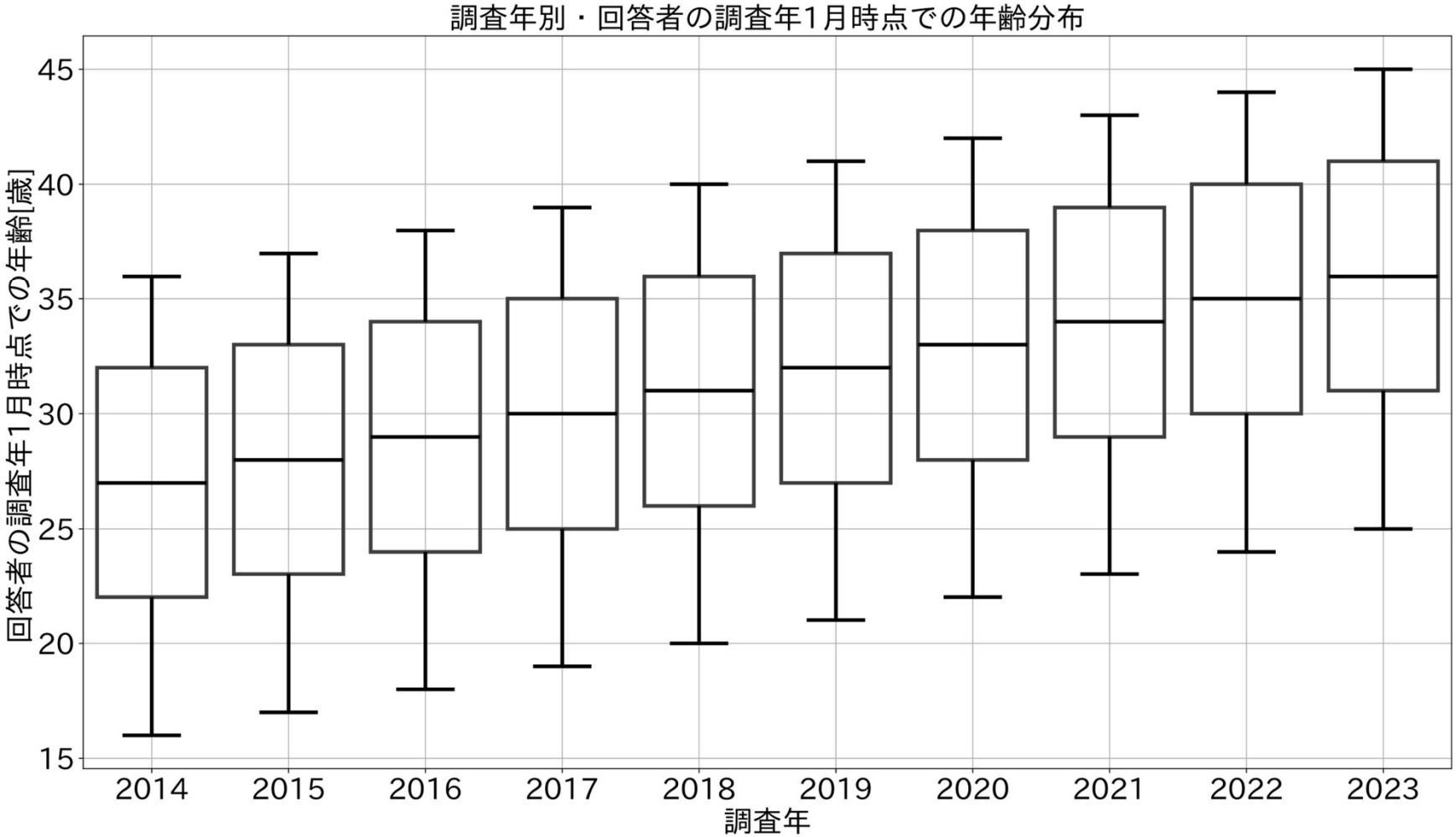
本調査の特徴

本調査の留意点

- 過去10年間の各年1月時点で交際相手のいた独身者をサンプリングしており、パネルデータではない
- どの調査も、回答時点（2023/9）での年齢は25歳～45歳なので、各調査年の1月時点での年齢構成に関してトレンドがある（昔の調査ほど平均年齢が低い）
- 調査の設計上、参照できる回答が少ない年があるため、データから得られる件数の推移が実情を直接反映していない
  - 初めの数年間に回答が少ない：交際開始・結婚・交際解消
  - 終わりの数年間に回答が少ない：交際開始
- 過去の交際内容を思い出してもらっているため、リコールバイアスが存在し得る
  - 対策として、記憶を確認する追加の質問をしている

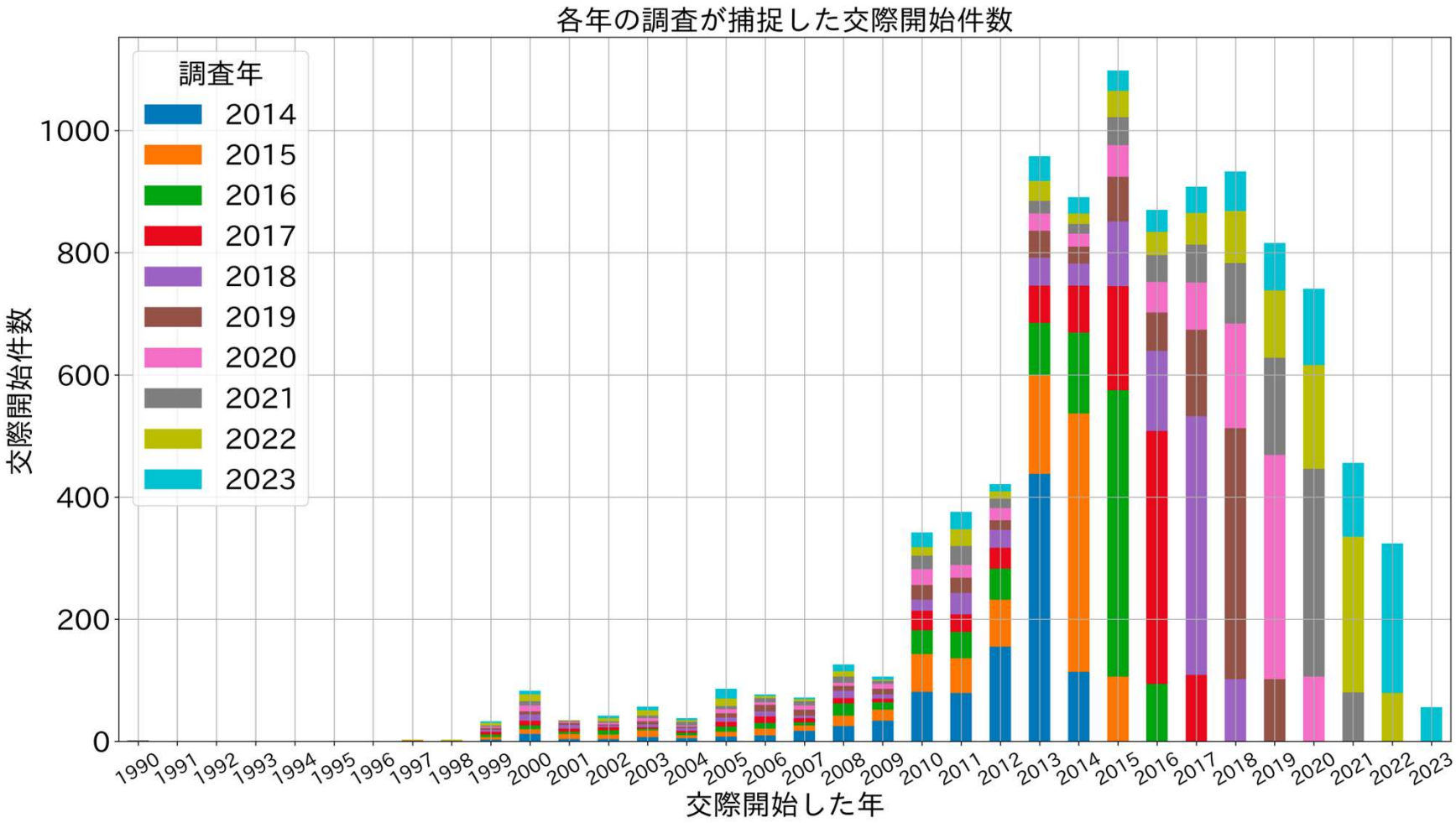
※二点目と三点目に関して、p.8~10で解説

各調査年の1月時点での年齢構成に関するトレンド



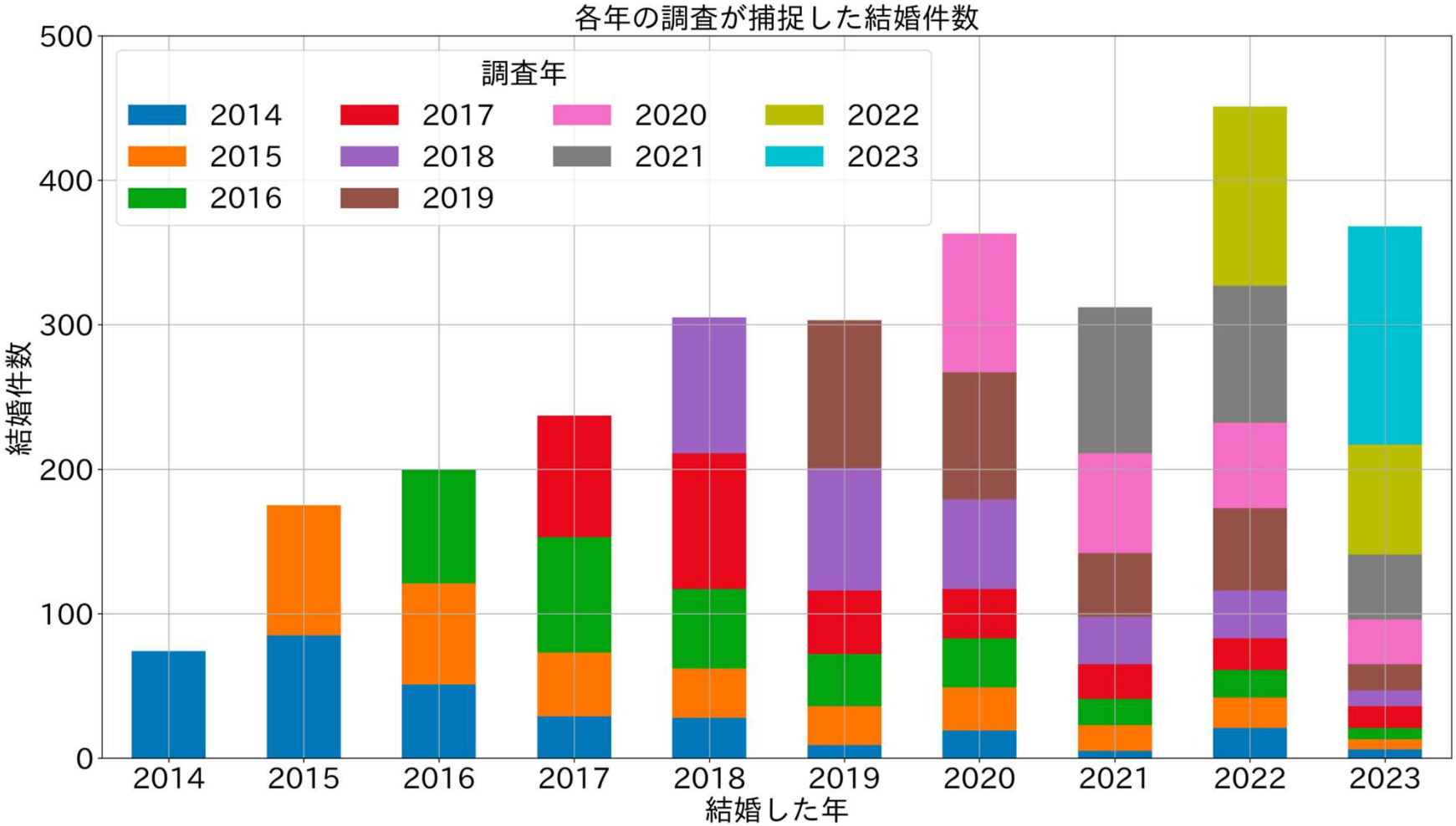
2023年9月時点での回答者の年齢が25~45歳になるように調査が設計されているので、2014年時点で、回答者は今より全体的に約10歳若い。

各年の交際開始件数の調査年別内訳



2023年の数字は一つの調査年に基づき、2022年の数字は二つの調査年に基づく。一方で、2013年の数字はいくつもの調査年に基づいている。もし仮に2024年以降の調査があれば、2023年・2022年等の数字はもっと多くなる。

各年の結婚件数の調査年別内訳



2014年の数字は一つの調査年に基づき、2015年の数字は二つの調査年に基づく。一方で、2023年の数字はいくつもの調査年に基づいている。もし仮に2013年以前の調査があれば、2014年・2015年等の数字はもっと多くなる。

結果

アウトプット一覧

図1： 1年、2年以内に交際開始していた人の割合の推移

図2：交際開始時点での雇用形態・交際開始時点での年収・出会い方の割合の推移（男女別）

図3：1年半、3年以内に結婚した人の割合の推移

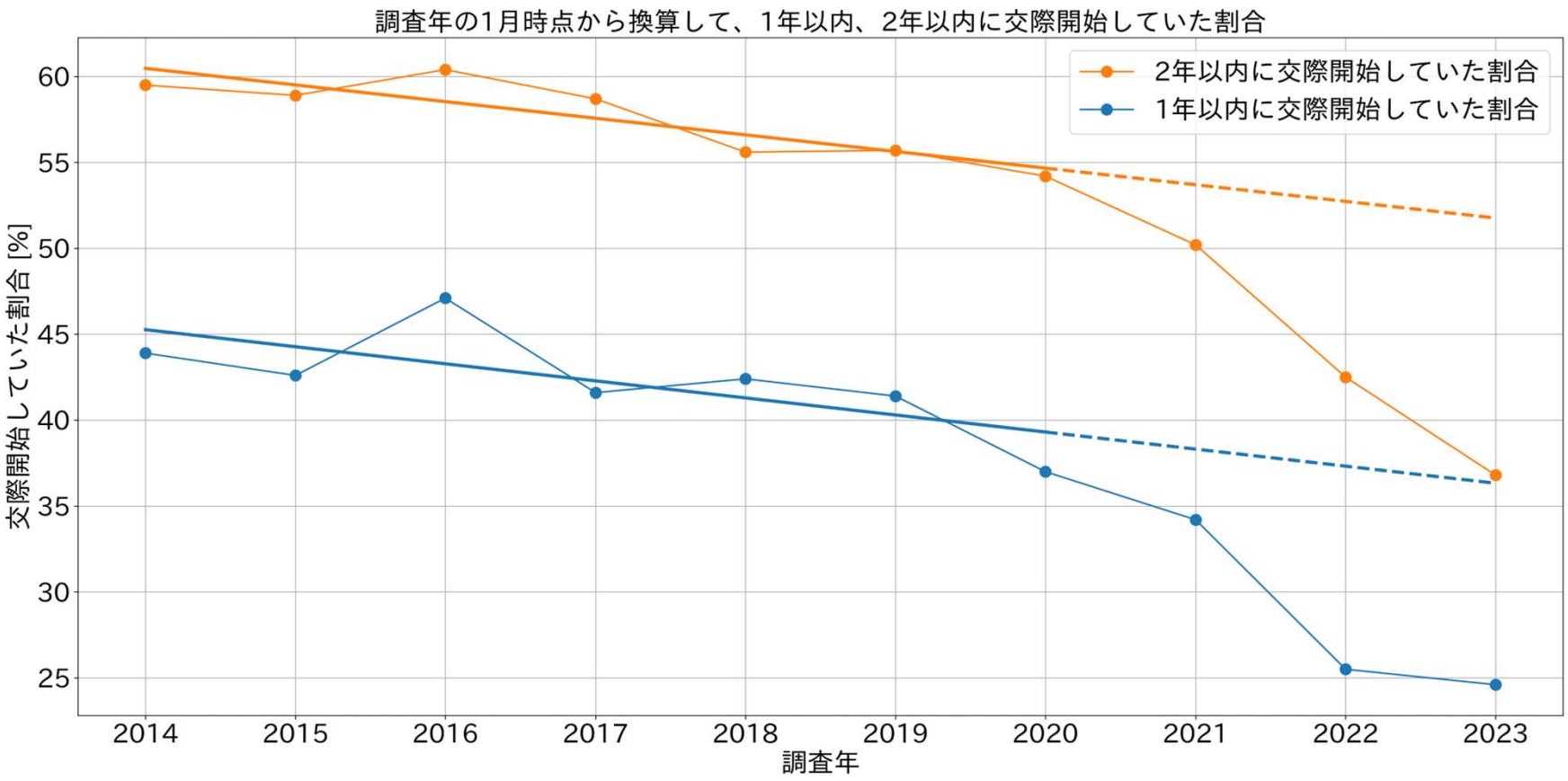
図4：結婚の時期を遅らせた人の割合の推移

図5：コロナ禍に関連している結婚の延期件数・前倒し件数の推移

図6：1年半、3年以内に交際解消した人の割合の推移

図7：交際解消理由の推移

図1：1年、2年以内に交際開始していた人の割合※の推移



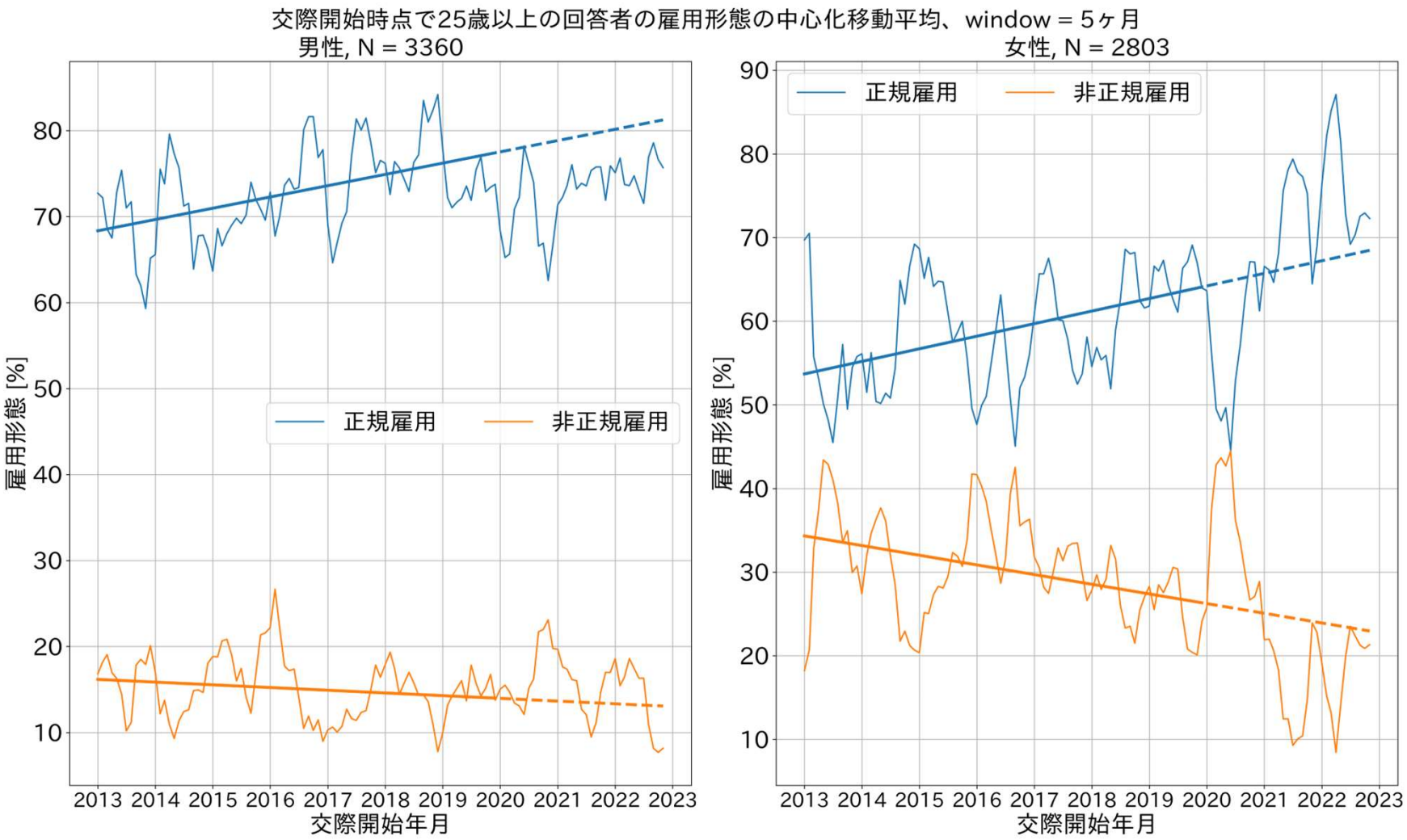
N = 9953

<u>2022年以降の調査では、直近1、2年以内に交際開始した人の割合が大きく減少</u>

留意点：年齢が高くなると結婚を意識した長期間にわたる恋愛が増えるとしたら、調査年が直近であるほど回答者の年齢層は高くなるため、新規の交際が発生する確率は低くなる可能性。観察される10年間にわたる上方トレンドはこれを反映している可能性がある。

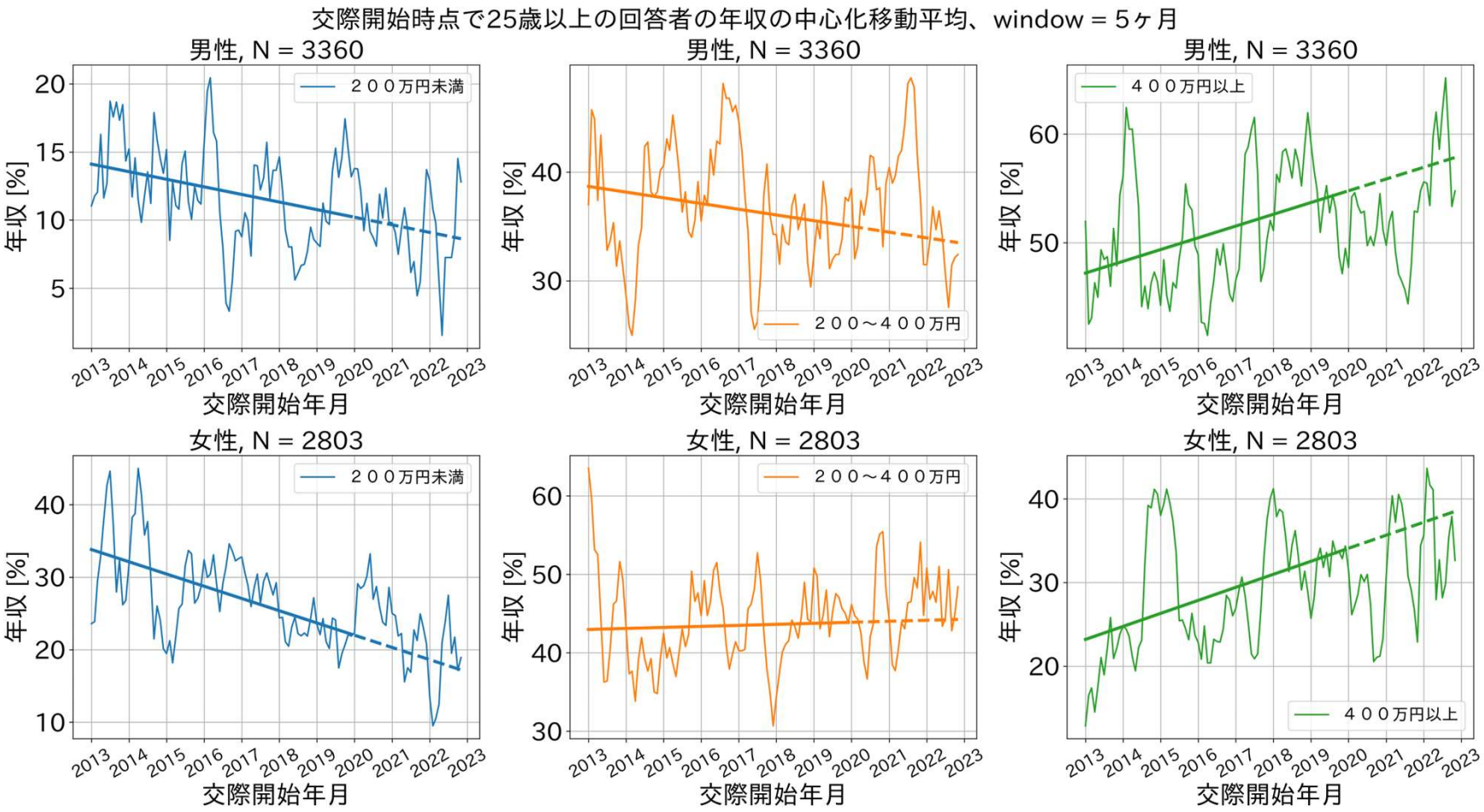
※調査年が2016年の場合、1年以内の値は、2015年1月~2015年12月に交際開始していた割合（2016年1月に開始した交際は含まない）

図2-1：交際開始時点での雇用形態の割合の推移（男女別）



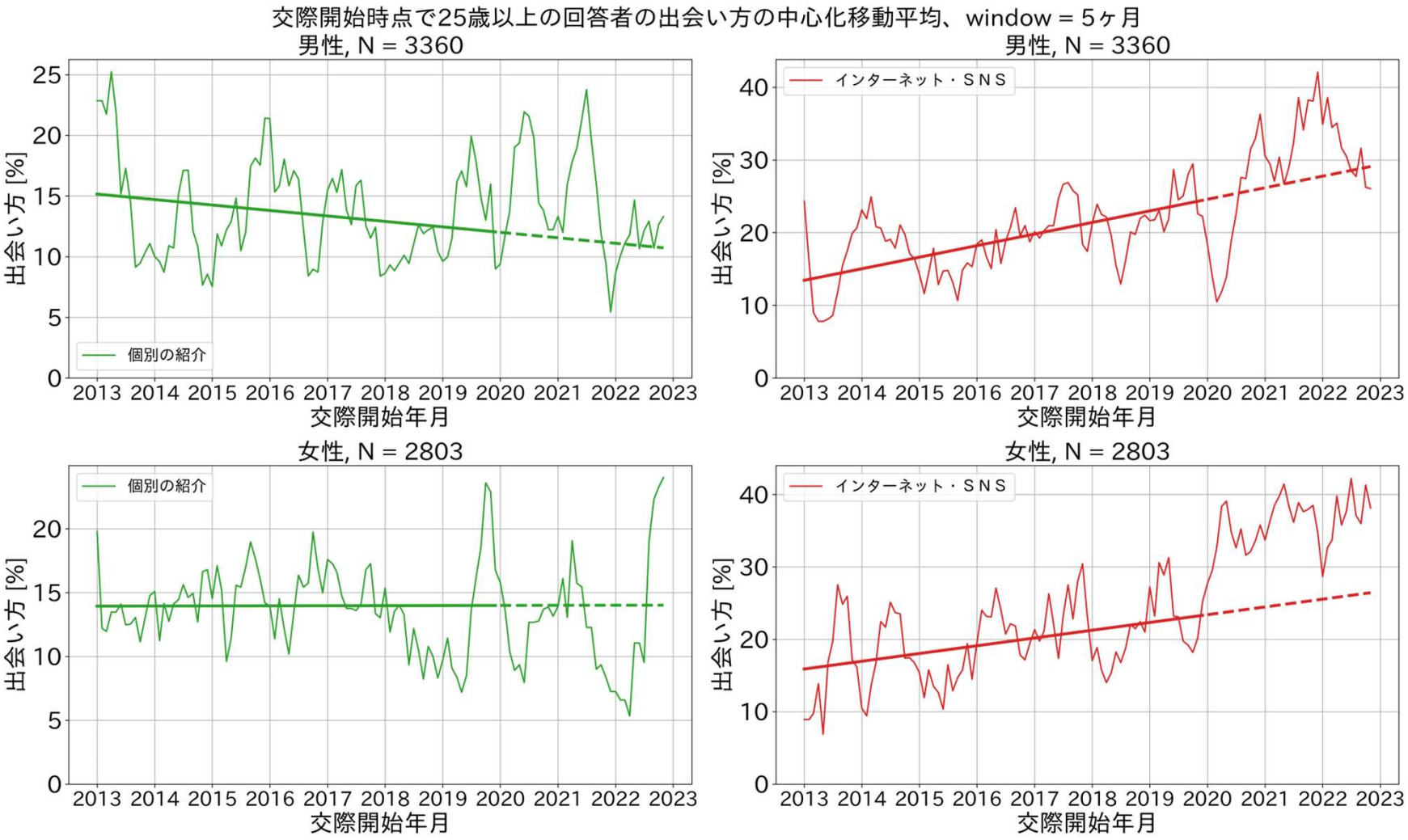
女性の交際開始時点での非正規雇用者の割合が、2020年に一時的にトレンドを上回った

図2-2：交際開始時点での年収の割合の推移（男女別）



<u>女性の交際開始時点での年収200万未満の割合が、2020年に一時的にトレンドを上回った</u>
留意点：調査年が直近であるほど回答者の年齢層は高くなることが、年収を高くさせる圧力を加える。
男女ともに、調査年にわたって高収入の割合が増加していることは、これを反映している可能性がある。

図2-3-1：出会い方の割合の推移（男女別）



女性の出会い方におけるインターネット・SNSの割合が、2020年以降トレンドを上回っている

図2-3-2：出会い方の割合の推移（男女別）

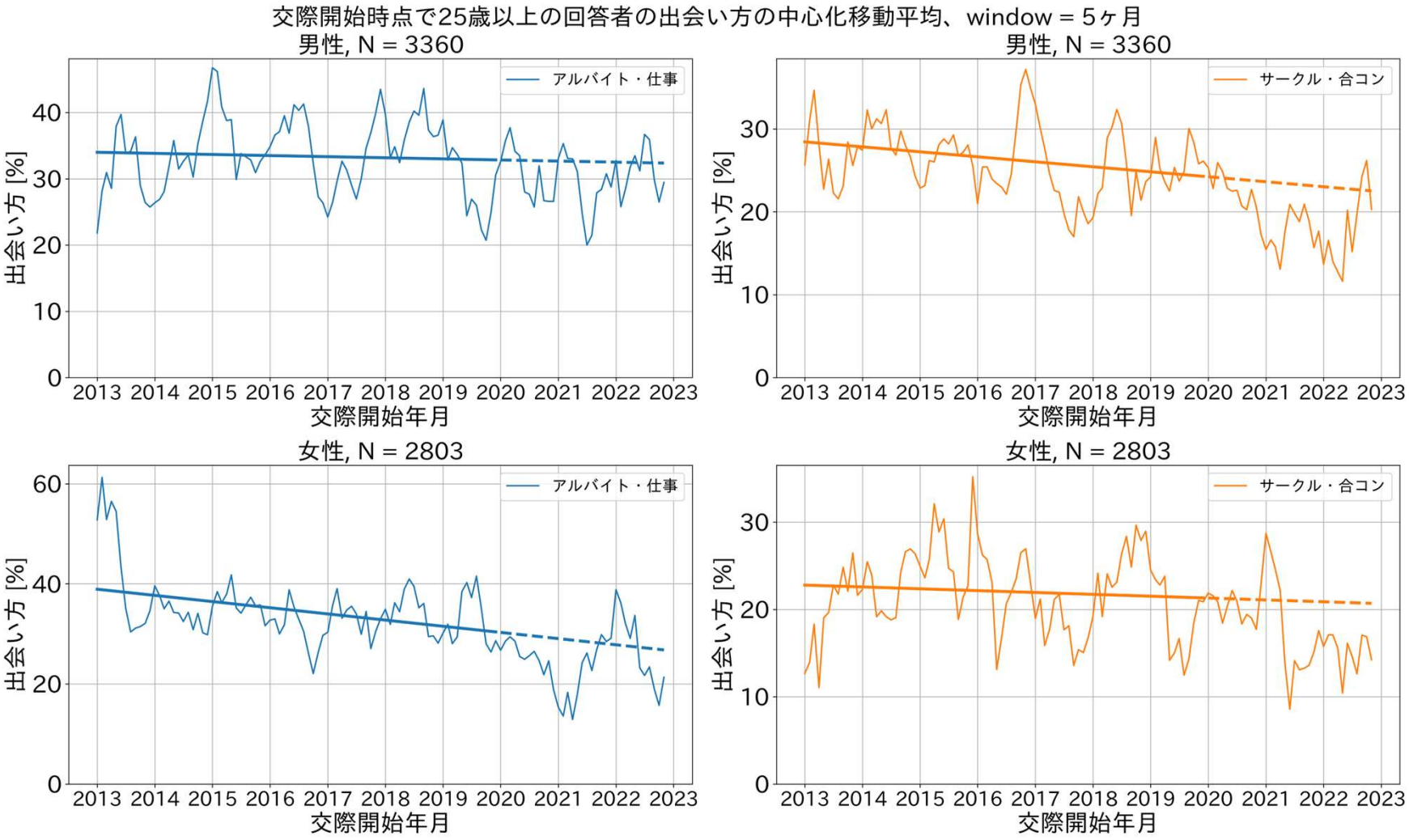
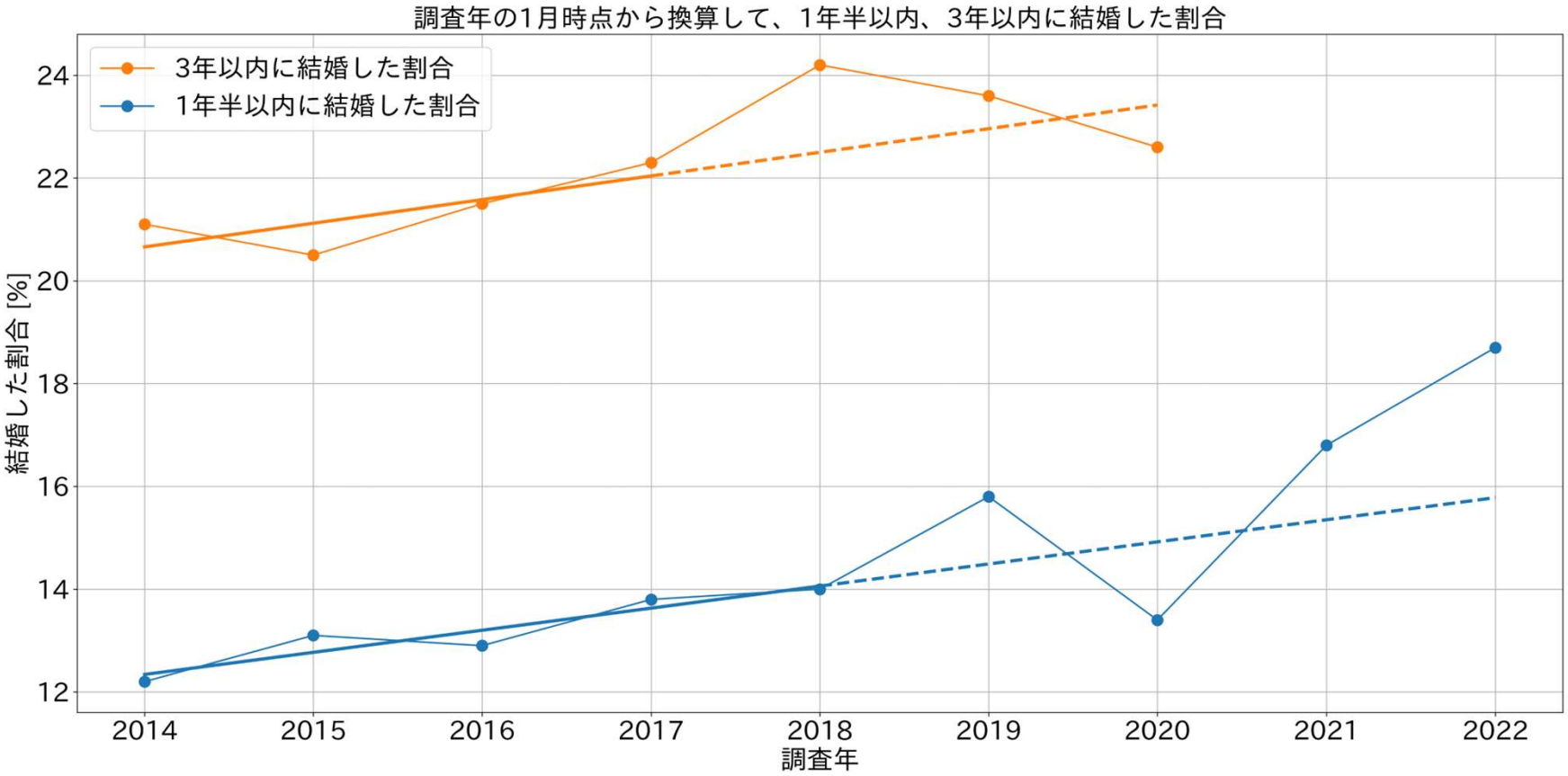


図3：1年半、3年以内に結婚した人の割合※の推移



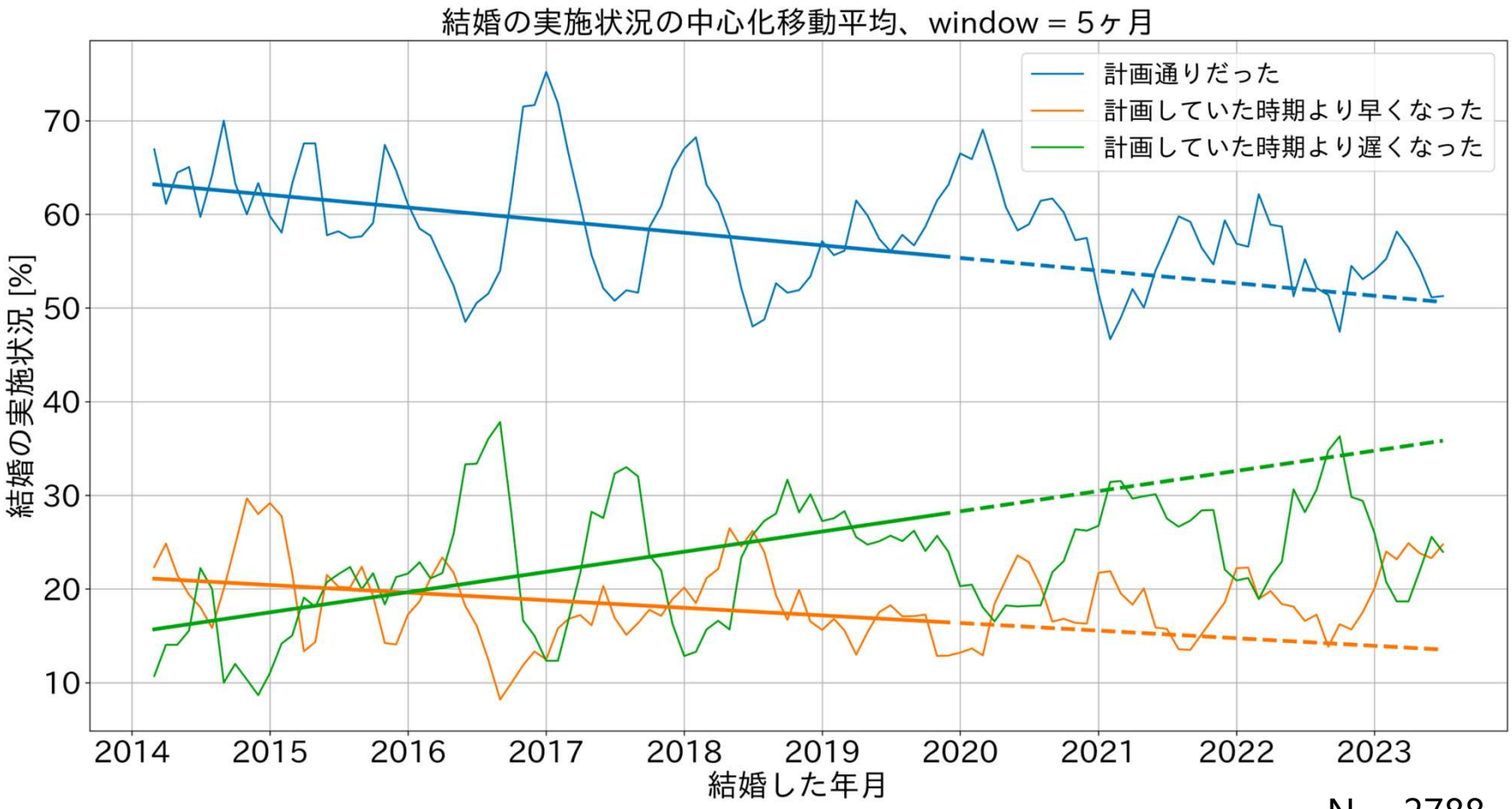
N = 9953

<u>コロナ禍以降、結婚の時期に大きな変化があったとは言えない</u>

留意点： 調査年が直近であるほど回答者の年齢層が高くなることが、結婚するまでの期間を短縮させる圧力を加える。観察される上方トレンドはこれを反映している可能性がある。

※調査年が2016年の場合、1年半以内の値は、2016年1月~2017年6月に結婚した割合

図4：結婚の時期を遅らせた人の割合の推移

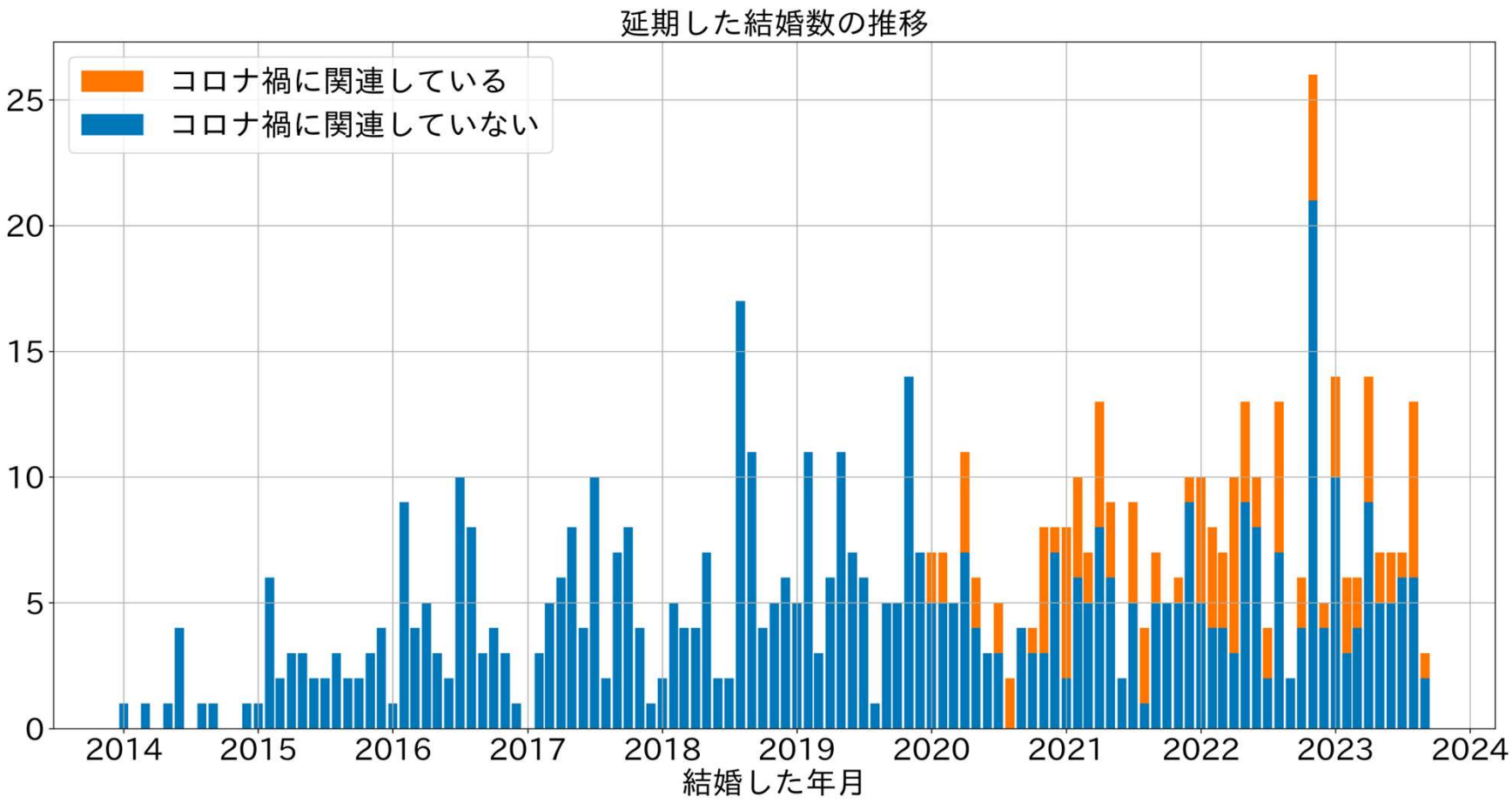


N = 2788

<u>コロナ禍以降、結婚の時期を遅らせた人の割合に大きな変化は見られなかった</u>

留意点：調査年が直近であるほど回答者の年齢層が高くなることが、結婚の遅延を減少させる圧力を生む。それにも関わらず、調査期間にわたって上方トレンドが見られる。

図5-1：コロナ禍に関連している結婚の延期件数の推移

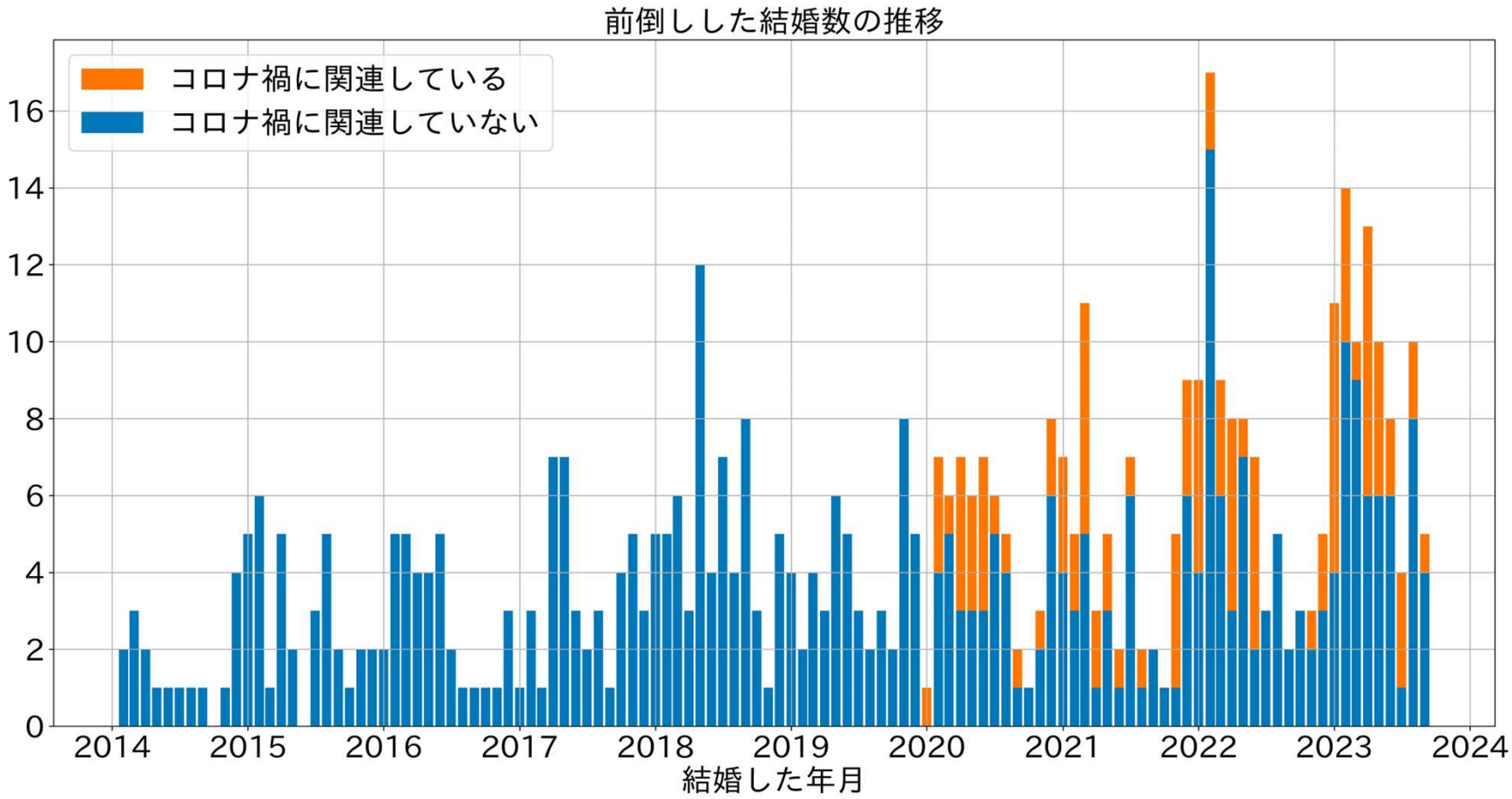


N = 655

<u>2020年以降、コロナ禍に関連している結婚の延期が見られる</u>

留意点：直近の調査年の方が結婚の件数が増えているので、延期件数自体も多くなりやすい

図5-2：コロナ禍に関連している結婚の前倒し件数の推移

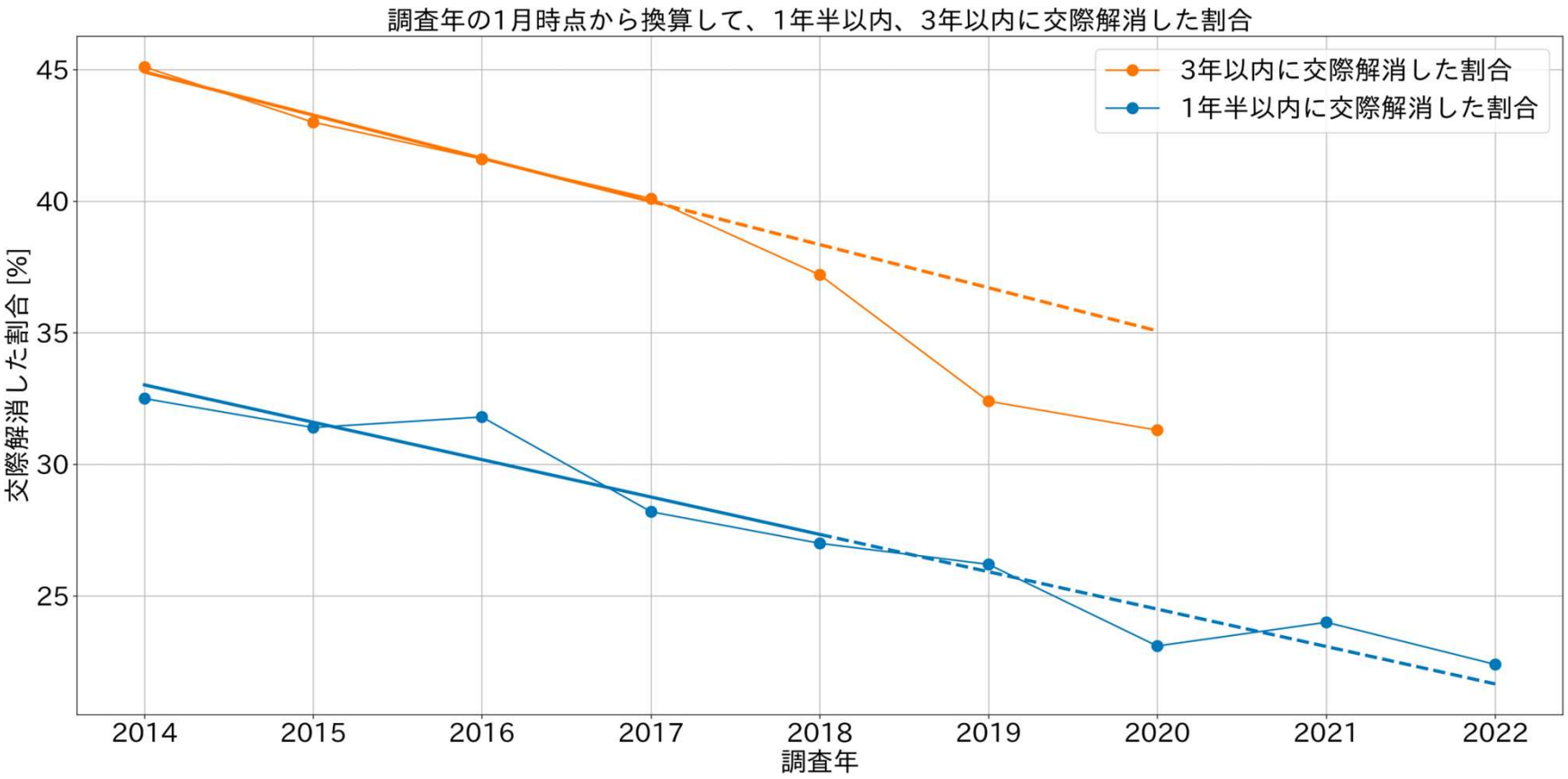


N = 517

<u>2020年以降、コロナ禍に関連している結婚の前倒しが見られる</u>

留意点：直近の調査年の方が結婚の件数が増えているので、前倒し件数自体も多くなりやすい

図6：1年半、3年以内に交際解消した人の割合※の推移



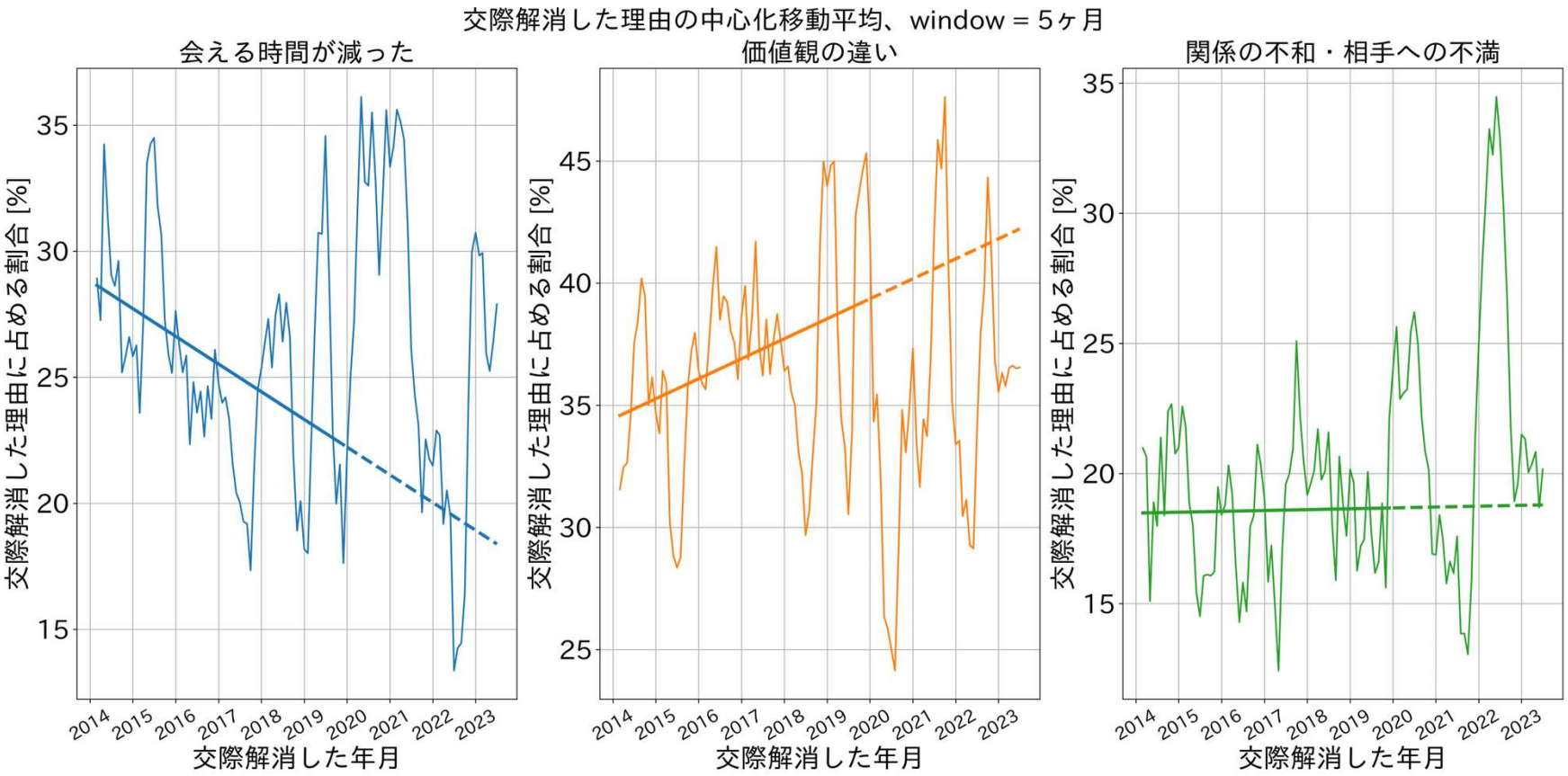
N = 9953

<u>コロナ禍以降、交際解消の時期に大きな変化は見られなかった</u>

留意点：調査年が直近であるほど回答者の年齢層が高くなることが、交際期間を長期化させる圧力を加える。観察される下方トレンドはこれを反映している可能性がある。

※調査年が2016年の場合、1年半以内の値は、2016年1月~2017年6月に交際解消した割合

図7：交際解消理由の推移



N = 3872

「会える時間の減少」の割合（「価値観の違い」の割合）が、2020年に一時的にトレンドを上回った（下回った）

「関係の不和・相手への不満」の割合が2020年、2022年に一時的にトレンドを上回った

留意点：調査年が直近であるほど回答者の年齢層は高くなる。仕事での責任が増えるなどして恋愛だけに注力できないと、「価値観の違い」が別れの原因になりやすいかもしれない。この仮説が正しければ、観察される上方トレンドはこれを反映している可能性がある。